



友達

ごっこ

*** 孤独に悩むすべてのママたちへ

雪姫

自転車をこいで行くには少し息の切れそうな長い坂を上りきった場所に、その公園がある。

砂場の他に、ペンキのはげかけたすべり台とブランコがそれぞれ一台づつしかない小さな公園だが、この辺りには他に子供を遊ばせる場所がないのと、比較的小綺麗な公園ということもあって、今日のように天気の良い日の午前中には、近所の子供とその母親たちが一斉に集まってくる。

直子が二歳になったばかりの息子、友樹を連れてようやく坂を上り終えた時にも、まだ朝の九時を回ったばかりだというのに、公園内にはすでにさざめきが広がっていた。

ベビーカーで眠っている日光浴中の乳児、遊具を飛び回って遊ぶいたずら盛りの子供たち。そしてその周りを取り囲むように、母親たちがいくつかのグループを形づくっている。見慣れたいつもの光景だ。入り口に続くコンクリートの階段を上がり、敷地内に足を踏み入れたとたん、友樹はまるで鎖から放たれた小犬のごとく直子の手を振りほどくと、大好きな砂場めがけて一目散に走り出した。

「あら、トモくんおはよう」

「しばらく見ないうちにまた背が伸びたんじゃない？」

友樹の後を追っていくうちに、顔見知りの母親たちから次々と声がかかる。あとはこの中に交じって適当におしゃべりをしながら、お昼までの時間を過ごせばいい。

—それにしても。

直子がつくづくと思う。こうしてすんなりとグループに受け入れてもらえる立場を手に入れるまでに、一体どれだけの苦勞を重ねてきたことだろう。

直子は、家から持ってきたシャベルや熊手といった砂場用のおもちゃを友樹のために並べてやりながら、ハイハイを始めたばかりの友樹をベビーカーに乗せ、初めてこの公園に来た日のことを思い出していた。

あの日も今日のようによく晴れていて、たくさんの親子連れがいた。そう、本当にたくさんの一。

だが、その中の誰一人として、直子に声をかけてくれる人はいなかった。それどころか公園内にいる誰もが直子たちの存在に気付いてさえいないようで、直子は友樹を抱いたまま、仕方なくさびついた二人掛けのベンチに腰を下ろした。

しばらくぼんやりと公園内を眺めていたが、そうしていればいるほど、自分と友樹だけがここにあるすべてのものから切り離された世界にいるような気がしてくる。日だまりが心地良いのか、友樹もいつのまにか直子の腕の中で寝息を立て始めた。

もう帰ろうか—そう思った時だった。

視線を移した先から、ベビーカーを押した母親がこちらに向かって近付いてくるのが目に入った。

直子の前で止まったベビーカーには、髪にリボンを結び、おしゃぶりをくわえた女の子がおとなしく座っている。見たところ大体友樹と同じくらいだろうか。

「こんにちは」

直子が先に声をかけると、彼女は少し驚いたように、顔を上げて直子を見た。

彼女のために、直子は素早くベンチの端に腰を移動させながら、

「何ヵ月ですか？」

と聞いた。相手はげんげんな表情のまま、「八ヵ月です」とだけ答えた。

そのあまりなぶつきらぼうな口ぶりに、直子は戸惑ったが、思った通り子供同志が同じ月齢だったことが嬉しくて、更に話しかけようと身を乗り出した次の瞬間、

「あら、今日は先客がいるのね」

背後で誰かの声がした。慌てて振り向くと、いつの間に来たのか、そこにベビーカー連れの母親が、直子を見下ろすようにして立っていた。

二人が知り合いであることは、彼女たちの様子からすぐにわかった。

「そうなのよお。私も今来たところなんだけどね……」

ついさっき直子が話しかけた時には、にこりともしなかった人が、まるで別人のように表情をくずしている。

「仕方ないわね。ベンチが空くまでここで待っていきましょう」

「そうね。そうしましょうか。あ、そういえば今朝、この子ったらね……」

直子は反射的に立ち上がり、直子を挟んでおしゃべりを始めた二人に向かって、

「あの……どうぞ」

とだけ言った。

すると信じ難いことに、二人はさっさとベンチに腰を下ろし、何事もなかったかのようにおしゃべりの続きを始めたのだ。ベンチを譲ってあげた直子に対して何らお礼の言葉をかけるでもなく、まるでそうされることが自分たちの当然の権利でもあるかのように堂々と――。

直子はあまりの出来事に困惑し、しばらく呆然とベンチの横に突っ立ったまま動くことができなかった。

きっと、公園のこのベンチに座っておしゃべりをすることが、彼女たちの日課なのだろう。

その彼女たちにとって、何の断りもなくベンチを占領していた直子は、自分たちの領域を侵す、ただの侵入者でしかなかったのだ。

いたたまれなくなった直子は、友樹をそっとベビーカーに寝かせ、結局誰とも言葉を交わすことなく、逃げるように公園を後にした。

友樹を出産してから購読している育児雑誌には、公園で子供を遊ばせながら母親同志が楽しそうに談笑している写真が、毎月誌面のあちこちに載っている。自分も子供と一緒に公園に行きさえすれば、自然に友達ができるものだと思っていた。

しかし、それがいかに甘い考えであったかを思い知らされたような気分だった。

そんなわけで、直子の公園デビューは散々な結果に終わった。

だがそれから直子は雨の日を除き、友樹をベビーカーに乗せ、時には手を引いて、くる日もくる日もこの公園に通い続けたのだ。その理由は、もちろん遊びたい盛りの息子を満足させるためということもあるが、大半は自分のためだった。

あの頃、もし「今一番ほしいものは何か」と聞かれたら、迷わず「友達がほしい」と答えただろう。

一日中狭い部屋の中で子供とたった二人きりで過ごしていると、口にするのは幼児語ばかり。会話の相手は「マンマ」と「パパ」と「ブーブー」しか発音できない子供だけで、ともすれば夫以外の大人と全く話をしない日が日常的になっていく。

その頼みの綱であるはずの夫でさえ、毎晩残業だ、飲み会だと帰りは遅く、たまに定時に帰ってきたかと思えばビールを片手にゴロゴロとテレビを見ているだけで、大してあてにはならない。それは昔からの友達連中にしても同じことだ。

地元の短大を卒業してから九年。

まだ独身のまま仕事を続けている友達とは、もう住んでいる世界が違い過ぎてとっくに話が合わなくなっているし、同じくらいの子供がいればいたで、お互い育児に時間を取られ会うことすらままならない。

結婚しても子供ができて、自分の生活ベースにはそう変化のない男と違って、自由が制限されてしまう女同志というのは、気楽な集まりさえ実現が難しいのだ。

他に仕事を持たず、育児に専念している主婦の生活がどんなに孤独なものか、社会の中で常に自分の居場所が保証されている男にはもちろん、たとえ同じ女でも、ドア一つに閉ざされた部屋の中でたった一人で子供を育てている者にしか

わからない。絶対に。

現に直子も、つい数年前まで、世の中にこれほどまで閉鎖的な世界が存在するなんて、想像してみたことさえなかったのだから。

たとえたわいのない雑談でもいい。

わけのわからない幼児とではなく、大人と話がしたい。

その一心で、砂を嘯むような思いを繰り返しながら、ひたすら公園に通い詰めるうち、何とか立ち話の輪に入れるようになり、今のように公園での居心地が良くなってきたのは、それから更に数ヶ月ほどしてからのことだった。

「日差しが強くなってきたわね。これ使わない？」

しばらく友樹の遊びに付き合っただけで砂を掘っていると、急に誰かに声をかけられた。

直子たちのそばで、砂のプリン作りに熱中しているはるかちゃんのママだ。

顔を上げると、日焼け予防のクリームが、直子の鼻先に差し出されている。

「今ごろの時期が一番紫外線が強いんだって」

「ほんと？じゃちょっと貸してもらおうかな」

直子は素直にクリームを受け取り、首のあたりにすり込んだ。

本当は肌につけるものを他人と共有するのは生理的に苦手なのだが、こういう場合は下手に断ったりしない方がいいのだ。

はるかちゃんのママとは子供同志が割と仲がいいということもあり、公園内だけでなく、近所のスーパーやコンビニで顔を合わせるたび世間話をする間柄だが、彼女自身の名前は知らない。

それは彼女にとっても同じことだろう。主婦の関係というのは不思議なもので、お互い名前がわからなくても「〇〇ちゃんのママ」と呼び合うだけで充分コミュニケーションが成り立つのだ。

「ところで、あの親子、最近よく見かけると思わない？」

「えっ、どこ？」

「ほら、あそこにいる女の子と……あ、今こっち向いた」

直子は容赦なく照り付ける光のすじを手で避けるようにして、はるかちゃんママが言う方向を見た。

公園の囲みに沿って植えられた茂みのそばで、落ち葉をすくい上げて遊んでいる女の子は、友樹よりも数ヶ月年長だろうか。

くるんとカールされた髪の毛が、その子が動くたびに背中や脇でダンスをしているように跳ね回っている。

そしてその子のそばに立っている母親の方は、見たところ三十を少し過ぎたかどうかといったところ。

おそらく直子とそうは違わないだろう。

もしかしたら同じ年かもしれない。

それはともかく——直子はふと思った。

最近人を見るとすぐにこんなふうに分と年を比べる癖がついてしまったのはどうしてなんだろう。

「トモくんママ、知ってる人？」

「ううん」

直子は首を振った。あの親子連れなら確かに二、三回見かけたことがあるような気がするが、別に話したことはない。

それに公園内の誰とも交わっていない様子を見ると、ここに来るようになってまだ日が浅いのだろう。

「この前のことなんだけどね。聞いてくれる？」

はるかちゃんママが急に声のトーンを低くした。

「すべり台の順番を待っていたらね、あの子がうちのはるかの前に無理矢理割り込もうとしてきたのよ。階段の上だし、子供たちが足を踏み外したりしたら大変じゃない。なのにあのママったらニコニコしながら『あらあら麻奈美ちゃんだめでしょ』ってそれだけの、それだけ。ごめんなさいでもやめなさいでもないんだから。私だったら、自分の子がそんなことしたら引きずりおろしてでもやめさせるけどね。でもさ、よくいるのよね、子供をびしっと叱れないお母さんって。ああいう人がいると私たちが困っちゃうと思わない？」

――また始まった。

直子は内心少しうんざりしながら適当にうなずいた。

この人も決して悪い人ではないのだが、どこか女子高生がそのまま年だけ取ったようなところがあって、もし子供という共通項がなければ、絶対に友達にはなりたくないタイプの女だった。

昨日自分の娘がおもちゃの取り合いのあげく、友樹を力まかせに突き飛ばした時、笑って見ているだけだったのはどこの誰だったのか。

大体、順番を守らないことにかけては、はるかちゃんだって負けてはいない。

ブランコでも何でもいつも我先にと乗りたがり、友樹を押しよけることなど日常茶飯事だ。

だがそんな時にも彼女が娘をびしっと叱っているところなど一度も見たことがない。

それにしても――この分では、今まで自分も何を言われていたのかわかったものじゃないな、と直子はひそかに思った。

自分が逆の立場になってわかったことだが、公園のいわゆる先住民である母親たちは、目の前の新参者に対して、決して無関心なわけでも、かたくなに無視を決め込んでいるわけでもない。

それどころか、あなたたちの存在になんか全く気付いていないわよ、というポーズを取りながら、実は全神経をはりめぐらせて新顔の母親たちを観察しているのだ。

彼女たちが身に付けているものから、髪型、化粧の濃さ、連れている子供の性格――といったすべてを、女性特有の好奇心と批判精神が複雑に入り交じった目で。

そしてその中に、ほんの少しでも自分の価値観には当てはまらない部分を発見したら最後、それはたちまち陰湿な陰口となって公園内をかけめぐることになる。

直子は改めてその噂の主に視線を向けた。

微妙なグラデーションがかけられた青っぽい色のニットに、ベージュのスカート。素足にこげ茶色のミュール。

特にどうということもないスタイルなのに、やけに洗練されて見えるのは、一つ一つのアイテムがおそらく質のいいものだからだろう。

この辺りは、古い団地や社宅が多いという地域性も関係しているのか、ほとんどの母親たちがTシャツかトレーナーにジーパンといった、比較的気楽な格好で公園にやってくる。

その中で彼女の雰囲気はやはり異質といってもよかった。

これではある程度、話題の種にされてしまうのもやむを得ないかもしれない。

何しろここに生息しているのは、暇だけは吐き気がするほど手にしていても、自由がないという連中ばかりなのだから。何かしらうさをはらすための対象がなくては、秩序は保てない。

直子は自分自身に言い訳するようにそう思いながら、友樹の方に向き直った。

「よかったらうちに一度遊びに来ませんか？」

噂の彼女から、唐突にそう誘われたのは、翌日のことだった。

「私ね。前からあなたとお友達になりたいなって思ってたの」

流行りの色の口紅が塗られた彼女の口から、その言葉が発せられた瞬間、直子は背中に妙な疼き

を覚えた。

医師に聴診器を当てられる直前に感じるような、寒気に似た嫌な感覚だ。

大人になってから、いや、少女時代にもいくら記憶を探ってみても誰かに面と向かって「友達になりたい」などと言われたことはただの一度もなかった。

もちろんそう言われて悪い気はしないが、ただ単純に不思議な気がした。

もともと人見知りのする性質の直子は、人に与える自分の第一印象がそう良いものではないことをよく知っている。

まして一度も口をきいたこともなければ、子供同志のつながりさえない人から、なぜそんな感情をもってもらえるのか。どう考えてもわからなかった。

「ね。私お昼に何か作るから一緒に食べましょう。うちの麻奈美も喜ぶと思うし」

こうまで言われては特に断る理由も思い当たらない。

「じゃあ……お言葉に甘えて、お邪魔させて頂こうかな」

「ほんとう？嬉しいわ、すごく」

彼女は直子が戸惑っていることには驚くほど無関心に、喜びをあらわにしてみせた。

直子の手を取り、子供がよくやるようにぴよんぴよんと飛び跳ねたのだ。

それはこのまま踊り出してしまうのではないかと直子が心配するほどの勢いで、直子は軽いめまいを感じた。

それはたぶん身体が揺れているからというよりも、彼女のおかげで自分までがむりやり無邪気な少女に戻らされてしまったような錯覚のせいかもしれなかった。

公園を出て住宅街の中を五、六分ほど歩くと、家々の屋根越しについて最近建設されたばかりの分譲マンションが見えてくる。

建設中から新聞の折り込み広告で頻りに目にしていた「空に近い場所で暮らそう」というコピー文句の通り、六十数階建ての超高層マンションだ。キャラメルを煮詰めたような色合いの塔が空を突き抜けるようにそびえ立っている。

「うちね、あそこなの」

はたして彼女はこれ以上はないといった絶妙なタイミングで、その円筒形の建物を指し示した。

「えっ、あなた、あのマンション買ったの？」

自分でもひどく間抜けな質問だと後悔したが、直子は聞いて確認せずにはいられなかった。

何でも最上階にある中庭付きの角部屋は百二十㎡という信じ難い広さで、その価格はゆうに億を越えるというのではないかと。他の部屋にしてもいくら日本の経済事情がデフレに移行したとはいえ、そう簡単に普通のサラリーマンが購入できるとは思えない。

この人の夫は何をしているんだろう。もしかしたらずっと年上のお金持ちか、どこかの御曹司か。あるいは彼女自身が裕福な家のお嬢様なのか。

いずれにしてもこの人がすごくいい暮らしをしていることは確かだ。

直子の内部で急に彼女に対しての興味が湧きあふれた。

それは自分の力では絶対にコントロールできない、得体の知れない厄介なものであることが直子には充分わかっていた。

「私ね。主人の仕事の関係で結婚してからずっと外国に住んでいたの。それがこの秋、急きよ日本に戻ってくることになって。はじめは社宅に入るつもりでいたんだけど、もうしばらく転勤はないだろうし、この際家を買ってしまおうかという話になって――あ、どうぞ入って」

彼女は慣れた手つきでオートロックを解除し、直子と友樹をマンションの中に招き入れた。

重厚な扉が観音開きに物々しく開くと、歩き出すのがためられるくらい、ふんだんに大理石を敷き詰めたロビーが現われた。正面には、係員が二十四時間常駐というサービスデスクが設置されており、直子たちが横切ると紺色のスーツを着た若い女性が深々と頭を下げた。

「お帰りなさいませ」

直子は反射的にお辞儀を返したが、彼女の方は女性には目もくれずに横切っていく。通りに面した場所には身体ごと沈み込んでしまいそうなソファがいくつも置かれたラウンジ、その奥にはちょっとした食料品や日用品が買える住人専用のコンビニがある。

そしてこの建物内のどこかには、いつかチラシで見たプール付きのアスレチックジムとシアタールーム、それからボトルキープが可能なカウンターバーがあるはずだ。

すべての設備や機能がここに住む人間のためだけに存在している。

それらはまるでひなを抱え込んで離そうとしない過保護な親鳥のようだ。

住民たちをここに閉じ込めておくために、これでもかと撒かれた便利という名のえさ――。

ここは限られた者だけが暮らすもう一つの都市なのだ。あの扉は、居心地のいい巣と下界を分断する遮断装置だ。

直子は、マンション中を隅から隅まで見て回りたくなる気持ちを押しさえ、なるべく冷静でいるように努めていた。

間違っても彼女から、東京に初めて出てきた地方の中学生のように自分が見られてはならない。何かこのマンションについてほめる時も、なるべく大げさにならないようにしなければ。でもどう言えばいいのだろう。考え付くほめ言葉の何もかもが陳腐に思える。

彼女は、こなれたベルガールのように、直子たちの少し先を歩き、時折こちらの様子確かめるように振り返った。

ホテルと違うのは、彼女が客である直子の下僕ではなく、ここの正式な住人であり、直子の方が単なるエキストラにすぎないということだ。

彼女の誘導に従ってエレベーターを降りると、両側に背の高い観葉植物が一定の間隔で置かれた内廊下が左右に伸びている。

友樹が寝転んでもよさそうな柔らかい絨毯の上を踏みしめながら、直子はなぜかふと軽い恐怖を感じた。

この同じ顔をしたいくつものドアの向こうでは、本当に誰かが食事をしたり、掃除をしたりといった日々の暮らしを営んでいるのだろうか。ドアの内部からもどこからも不気味なほど生活音がしない。外の喧騒も地上から遠く離れたここでは無縁のものだ。きっとこの静けさそのものが、このマンションのコンセプトである「生活感のない暮らし」というものに必要な要素であるのだろう。

彼女は廊下の一番端にあるドアの前で立ち止まり、カギを差し込み、レバーを押した。

「どうぞ。散らかってて恥ずかしいんだけど」

「お昼時にごめんなさいね。――お邪魔します」

背筋がかゆくなるような社交文句を交わしたあと、マンションにしては長めの廊下を抜け、リビングに通されたたん、直子の中から豆が弾け飛ぶようにそれまで持っていた何かが消えた。

「すごい――ほんとにすごいわ！」

質のよさそうな木材が張られたLDKは、ゆうに十五畳はあるかと思われるほどの広さで、応接セットやカーテン、花の形のシャンデリア、すべてが真っ白に統一されている。

リビングの中央に配置されたシステムキッチンの横には小さなホームバー。造りつけの飾り棚には、彼女の趣味なのだろう、背にオーガンジーの羽根を持った妖精のお人形や、陶器類、細々としたガラス細工がいくつも並んでいる。

「まるで雑誌に出てくるような」という常套句がこれほどぴったり当てはまる家もそうないだろう。

そういえば、北欧の家の中というのはこんな感じかもしれない。

今まで海外旅行の経験は、新婚旅行のハワイだけで、ヨーロッパには一度も行ったことはないが、きっとそうだ。

直子はリビングの中をうろうろと動き回りながら「わあすごい」「わあきれい」を連発していた。ついさっき「大げさにほめたりしない」と誓ったばかりなのに、もうそんな気負いはいとも簡単にどこかへ吹き飛んでしまっている。

リビングの奥の洋室は子供のプレイルームになっていて、室内用のブランコや滑り台、ジャングルジムなどが置かれてあり、さながらミニ遊園地のようだ。

「麻奈美ちゃん。ごはんができるまでお友達と遊んでいてね」

「はあい」

彼女の娘、麻奈美は母親の言い付けに素直に答え、「こっち行こ」友樹の手をとってその遊園地に連れて行った。

友樹は初めて来た場所にも関わらず、カラフルな遊具やおもちゃにランランと目を輝かせ、さっそくジャングルジムに昇りはじめている。

「先月越してきたばかりだからまだちっとも片付いていなくて。落ち着かないでしょうけど座って。とりあえずお茶を入れるわね」

「ありがとう」

直子は勧められるまま、肘掛けの付いたソファに腰を下ろした。

レースのカフェカーテンが掛けられた窓辺からは町並みが一望できる。

「すごいわねえ……」

直子は口の中でもう一度つぶやくように言った。

この部屋に色あせたトレーナーを着た自分はどう見ても不釣り合いで、直子は彼女が運んできたチョコレートの香りのするフレーバー紅茶をぎこちない動作で口に運んだ。

カップに二杯目の紅茶が注がれる頃には、お互い自分のプロフィールを一通り話し終えていた。彼女の名は、赤坂みどり。年齢は大体直子が予想していたとおりで、学年ではみどりの方が直子よりも一つ上ということになる。

「今日は急に誘ったりしてごめんなさい」

少し間を置いて、みどりが言った。

「実はね。断られたらどうしようって心配だったの。でも思い切って声をかけてみて本当によかった。こうしてあなたと仲良くなれたんだものね」

「あのう……」

直子は初めから感じていた最大の疑問を口にすることにした。

「どうして私なんかを……？ううん、別に迷惑だとかそういうことじゃないの。ただ公園には他にもいっぱいママたちがいるし。ましてうちは男の子でしょ。麻奈美ちゃんのお友達なら女の子の方がいいと思うし、どうしてかなあ……って」

直子が話している間、みどりは必ず直子の目をじっと見つめる。

まるで慈悲深いカウンセラーのように少し首をかしげながら。

直子が話し終えるまで絶対にそのままの姿勢をくずさない。

直子が凝視されていることに耐え切れなくなり、適当に言葉を切ると、ようやく彼女の視線が他に移る。

「うーん。そうねえ。なんて言ったらいいかしら」

みどりはブルーの小花模様が散りばめられたミントンのカップを両手で包むように持ったまま話し始めた。

「公園にいるお母さんたちって、みんな子育てにどっぷりつかっているというか……。こんなこというのもどうかとは思いますが、もう女を捨ててしまっているような人が多いじゃない？私ね、いくら結婚して子供がいて専業主婦やってるとはいえ、女性としての自分自身に興味がなくなったらもう終わりだと思うの。このままただのオバサンになっていくだけなんてとても耐えられない。子育て中もキレイでいたいし、自分にかまけてほしいのよ。もちろん外見のことだけでなく、内面も磨きたいわ。だってせっかく女性として生まれてきたのに、自分の存在価値が母親としての役割だけだ

なんて寂しいじゃない。ただこういう感覚って、根本的に価値観の違う人にはわかってもらえないものなのよね。だから直子さんとなら私、子供のことだけじゃなくもっといろんな話しができそうな気がして——あっ、ピザが焼き上がったみたい。ちよつとごめんなさい」

オーブンの加熱終了を知らせる音が鳴り、みどりは話を中断し、キッチンに立った。でも直子にはもう充分だった。

みどりの言いたいことが直子にはよくわかる。本当に何もかもみどりの言う通りなのだから。

何も公園で世界情勢や経済問題を論じたいわけではないが、毎日毎日人の家の夕食を覗き見するような会話の繰り返しには、もういいかげんうんざりしていたのだ。

出かけるところといえば、公園か近くのスーパー。

行動範囲に変化があるとすれば、せいぜい子供が熱を出して小児科に駆け込む時ぐらい——こんな生活をしていれば、ある程度視野が狭くなってしまうのも仕方のないことなのかもしれないが、もう少し建設的な話題もあるだろうと思う。

それに——直子はちよつと下を向いてトレーナーの袖口をひっぱった。

今日はたまたまこんな格好をしてきてしまったけれど、直子はもともと外見には人一倍気を使うタイプの女だった。

その証拠に、その辺にいる主婦のようにすっぴんのまま外出するなんてことは、——それがたとえ近所のコンビニにアイスを買に行くだけだったとしても——絶対にしたことがないし、それに今でも主流のファッション誌にはしっかり目を通して、流行のチェックも欠かさず行っている。

もちろんだからといって、独身時代のように流行りの服をそうぼんぼんと買えるわけではないし、またそんな必要もないのだが、今最先端にあるものを知識としてもっているのといないのとでは大違いなのだ。

とにかくそんな自分をみどりはちゃんと理解し、選んでくれた。彼女によって、あの公園にいる主婦たちと十羽ひとからげにされずにすんだのだ。

そう思うとみどりに抱き付いて小躍りでもしたい気分になってくる。

直子の中についさっきまでは確かにあった、彼女に対してのちよつとした猜疑感のようなものは、もうさっぱりと消え去っていた。

彼女には感謝しさえすれば、彼女のことを拒絶する理由など全くない。

あるはずがないとさえ直子は思った。

「おなかすいたでしょう？スープが温まったらすぐお昼にするからもうちよつと待っててね」

みどりが子供たちに向かって声をかけると、子供部屋から麻奈美の「はあい」という返事がした。

友樹も少し遅れて「はあい」と言っている。

「私も手伝うわ」

直子は立ち上がってキッチンに行った。そしてみどりに向かって、

「ありがとう」

と口にした。

さっきのみどりのように、今度は直子の方がみどりの目を見据えていた。そうしないではいられないほど気分がよかった。

「私たち、きっといい友達になれると思う」

マンションを出ると、午前中は暑いとさえ感じた日差しはもうすっかり影をひそめていた。

通り過ぎていく風がかすかに肌寒い。

はしゃぎ過ぎたのだろう、冬眠中の子熊のようにぐったりと寝入ってしまった友樹のずしん、という重みを肩や腕に受けながら、直子はアパートのさびついた階段を上った。

一段上がるごとに身体がきしむように痛い。

ドアを開けると、そこはもうすぐに台所で、シンクに重ねたままの食器や、フキン、生ごみ、冷蔵庫といったものが嫌でも目に飛び込んでくる。

仕切りになるものは何もなく、玄関と呼んでいる場所は台所の一角に一段下がってコンクリートの四角いスペースがあるだけだ。

薄っぺらな下駄箱を一応置いてはいるが、収まりきらない靴は常時出しっ放しにしておくほかはない。

友樹を抱いたままという不自由な姿勢で靴を脱ぎ、中に上がる。

台所の床は歩くとぺたぺたと音が鳴るビニール板で、その足の裏にはりついてくるような感触が直子は嫌でたまらなかった。

だがこの狭いところで、いちいちスリッパをはいたり脱いだりするの面倒で、そうなるの不快さを我慢するしか選択はない。

「あっ！」

そこで始めて直子は朝布団を干したままだったことに気が付いた。

ベランダで布団が激しく垂れ下がった状態で、風に揺らいている。

あわててそれを取り込み、何とか友樹を寝かせると、とたんに疲労感が襲ってきた。

もちろん十キロの身体を抱いて歩いたという肉体的な疲れが大半だが、疲れの原因はそれだけではないことが直子を少し苛立たせていた。

直子はまだ掃除機をかけていないカーペットの上に座り込み、見慣れたはずの家の中を改めて見回してみた。

細長い台所と南向きの二つの和室。

特にどうということもない、ごく一般的な造りの二DK。

しかしふすまで仕切られた六畳と四畳半の和室は、それぞれベッドやタンスといった家具や電化製品に占領され、大人がちよっと身体を横たえる空間さえない。

直子は整理整頓が決して苦手な方ではないが、いかんせん収納場所が限られたこの状況では、どう努力しても主婦向けの雑誌の見出しによくあるような「すっきりとした暮らし」を実践するのは不可能だった。

特に友樹が生まれてからはモノが増えたせいもあり、細々とした日用品があちこちにむきだしになっていてすっきりなどとは程遠い。

鴨居に吊るした生乾きの洗濯物。その辺に転がった友樹のおもちゃ。

部屋の隅に積み上げられた週刊誌――。

ついさっきまでいたあの家とは何という違いだろう。

「仕方がないじゃないの」

直子は誰にいうともなくつぶやいた。

住んでいる家の質や広さがそのまま女としての幸せに比例するなどとは当然思わないが、なぜだろう。

さっきみどりと別れてからずっと、何かしこりのようなものが胸の奥に巣食っている。

そうだこんな感じは前にも味わったことがある。

直子は記憶を辿った。

そう、あれは確か――小学校の三年生か四年生の頃、クラスに仲のいい友達ができ、初めてその子の家に遊びに行った時だ。

その子は地元で代々造り酒屋を営んでいる家の娘で、蔵の奥にある三階建ての建物が彼女の家だった。

三階建てとはいっても一階部分は事務所であり、居住部分は限られていたのだと思うが、当時の直子にとってはそんなことはどうでもよかった。

白い壁にツタのからまったその家は、直子の目にはどこかの国のお城のように映ったものだ。

「レコードでも聞く？」

彼女の部屋で一通りゲームなどで遊んだあと、彼女が言った。

まだレコードがCDに変わる少し前のことだ。

「何でも好きなの選んでいいよ」

そう言って彼女が開けたボードの中には、当時女の子たちに人気があったアイドルグループのレコードがずらりと並んでいた。

「すごい！これ全部持ってるの？」

直子は目を丸くしてレコードの束を覗き込んだ。レコードなどたとえシングル盤でも小学生がおこづかいで安々と買えるものではなかったし、現に直子はレコードをたった一枚しか持っていなかった。

その一枚も臨時にもらったおこづかいなどをかき集めてやっと買ったもので、次に買えるのはいつなのか、まして全部揃えることなど直子には気が遠くなるほどの夢だった。

「新曲が出たらすぐにも買ってもらうから。ね、どれ聞く？」

その時友達の部屋で聞いた曲は覚えていない。

ただ今も残っているのは、ぬいぐるみのいっぱいある個室といい、全作揃ったレコードといい、自分にはないものを、いとも簡単に手にしている子がいるという現実。そのことがはっきりと妬ましいと思った。あの感情。

直子の家も決して貧乏というわけではなかったが、その子のようにほしいものをすぐに手に入れられるという環境ではなかった。

生まれた家、という自分では決して選ぶことができないものがあるという理不尽さをあの時直子は子供なりに悟ったのだ。

ただあの頃と違うのは、直子はもう与えられた生活の中でしか生きられない少女ではなく、夫を含め、今の生活すべては直子自身自分の意志で選び取ったものであるということだ。

何だって今になって、とうに振り切ったはずのこんな思いにまたとらわれなければいけないのか。

「今度は私が直子さんの家に遊びに行くね」

別れ際、みどりははっきりとそう言った。

とっさに「ええ、ぜひ」とは答えたものの、ここを訪れた時のみどりの表情を想像してみただけで気が重くなってくる。

実は、みどりには言わなかったが、直子があのマンションに行ったのは今日が初めてではなかった。

まだマンションが建設中の頃、夫の光彦を誘ってモデルルームの見学に行ったことがあった。

若い営業マンに連れられて他の見学者と一緒に中をあちこち見て歩いたところまではよかった。

見せられた部屋はすべて申し分のないものだったし、初めは冷やかしのつもりだったのが、（買っちゃおうか…）とだんだんその気になってきた。

しかし、その後事務所に戻り営業マンと具体的な話を始めた段階で、自分たちの経済力では到底買えるはずがないとい

うことがわかり、あきらめたのだ。もともと本気ではなかったとはいえ、どう転んでも無理だという現実直子を落ち込ませるには充分だった。それなのに。

一方でそれを簡単に手に入れている人間がいる。みどりが自分と比べて特に美しい女だとも思えない。

確かにいいものを身に付けてはいるし、肌も年齢の割には張りがあってよく手入れをしているようだったが、顔立ちに限っていえば自分の方が勝っているとさえ思う。なのにどうして、みどりが高級マンションで自分は二DKのアパートなのだろう。

その夜。直子は珍しく自分から求めて夫に抱かれた。今夜だけは、夫に充分愛されている幸せな妻の座というものを身体中で実感したかった。

そうしなければとても心のバランスが保てないような気がしたのだ。

もともと細身にできている光彦は、体力に恵まれない分、昔からテクニックだけは上手だった。友樹を妊娠中、いよいよお腹がせり出してきた時にも、よく指先の動きだけで直子を頂上まで導いてくれたものだ。

「もっと抱いて。ぎゅっと抱いて」

うわごとのように叫び続ける直子に、

「友樹が起きても知らないからな」

光彦は荒い息を吐きながらテンポよく腰を打ち付けてきた。

光彦の骨張った腕の中で、直子は何度も小さな声を上げた。

赤と紺と黄色を配色したポロシャツに、ニットの帽子。色とりどりのレインブーツ。

有名子供服ブランドの店内は、そんなカラフルな服や小物が壁いっぱいにディスプレイされ、まるでおもちゃ箱のような賑わいだった。

入り口の両脇に置かれた大人ほどの背丈があるクマのぬいぐるみ。天井から吊り下げられた男の子と女の子のマネキン人形――。

直子は自分たちの方が知らない国に迷い込んだお人形になったような気がして、今にも走り出しそうとする友樹の手を強く握った。

「うちの麻奈美ったらここ以外の服は絶対に着ようとししないのよ。まだチビのくせに生意気でしょう。ほんとに困っちゃうわ」

みどりはちっとも困っていない、というふうにならんと、首を伸ばしてぐるりと店内を見回した。すぐに一人の店員が反応し、直子たちに走り寄ってきた。

「いらっしやいませ。いつもありがとうございます」

お下げにした髪にリボンまで結んだ、幼稚園の先生のような店員が、みどりにペコンと頭を下げた。

直子は、店員さんたちのこうした甲高い声や、顔に張り付けたような笑い顔がどうも苦手で、声をかけられるといつも逃げ出してしまうのだが、みどりは全くそうではないようだった。

「今日はね、お友達と一緒に来たの」

みどりが言うと、店員が思い出したように直子にも笑顔に向けた。

「私ね、前から一度男の子の服を選んでみたいと思っていたの。今日は私がトモくんのスタイリストになってもいい？」

みどりはさも楽しげにそう言い、顔見知りらしい店員を引き連れて、店内を回り始めた。

「ねえねえ、これなんかどう？こっちもいいわね」

みどりは次々に服を持って来て友樹に試着をさせた。友樹は鏡の中で七変化する自分の姿がおかしいのか、されるがままになっている。

「おぼっちゃま、本当に何でもよくお似合いですね」

店員がそのたびにとってつけたようなほめ言葉を口にする。

そりゃそうよ――と直子は心の中で思った。

見ず知らずの店員に言われるまでもなく、光彦に似て色の白い友樹は、大抵の服は似合ってしまうのだ。

現に真っ白いシャツをふんわりとはおった友樹は、親の欲目も手伝ってかもしれないが、どこから見ても小さな王子様だ。

しかし直子にとって重要なことは、もっと別のところにあった。

みどりと店員が離れたすきに、素早くシャツの襟元に付いたタグを裏返してみる。一万五千元。

同素材の吊りズボンをセットにすると、軽く三万円を越えてしまう。

たかが子供の普段着にそんな大金をかけられるほど、光彦の給料は高くはない。

結局直子は友樹の靴下を一足だけ買った。別に靴下など大して必要なわけでもない。どうしても他に買えるものが見つからなかったのだ。

新しいワンピースを買ってもらった、と喜んでいる麻奈美のそばで、何も知らずに走り回る友樹が哀れだった。

直子は今日ほど我が子が男の子でよかったと思ったことはない。

男の子ならヒザがすり切れたズボンをはいていてもそうみじめなこともないが、もしこれが麻奈美と同じ女の子なら親子共々本当に情けない思いをしたに違いない。

それがせめてもの救いだった。

「そろそろおなかすいてきちゃった。どこかでおいしいランチでも食べて帰らない？」

「そうね。じゃあ——」

そのへんのファミレスにでも、と直子が言いかけると、みどりがそれをさえぎるように言い放った。

「駅前のTプラザはどう？この前家族で食事に行った時すごくおいしかったの。ね、そこにしましょ。私どうしてももう一度行きたくて」

Tプラザというのは、時代に逆行するように派手な結婚式を売り物にしていることで有名な、この町では一応老舗のホテルで、みどりが直子を連れていったのは、その最上階にあるバイキング形式のレストランだった。

大人一人が四千八百円。

子供はその半額ですむとはいえ、二人合わせると結構な金額になる。

それだけのお金があれば余裕で三日分の食費になる——そう思うとあまりにもったいない気がしたが、

「ここ、デザートケーキがすごくおいしいの。みんなでたくさん取って食べくらべしましょよ」

そんなふうにはしゃいでいるみどりに向かって、

「こんな高いところやめましょよ。ファミレスかファーストフードでいいじゃない」

などと言えるものだろうか。少なくとも直子には言えなかった。なぜかわからないがそういうことを口にはいけないような雰囲気のみどりにには確かにあった。

きっと、みどりのような女には、たかが百円のものを買うのにさえいちいち頭を痛めている、またそうすることが癖になってしまっている主婦の生活など想像もつかないのだろう。

世の中のすべての人が、自分と同じようなお金の使い方ができる、とはなから思い込んでいるのだ。

クリームのおたっぷりかかった鶏肉や、生ハムに温野菜、果物などを皿に取り分けながら、直子はふと光彦のことを思った。

——今頃、パパは何を食べているんだろう。

ひと月の彼のお小遣いは、昼食代込みでぴったり三万円。

どう間違ってもこんなに高いものを食べているはずはない。

せいぜいどこかの食堂で五百円程度の定食か、コンビニのお弁当。

もしくは立ち食いのそばあたりがいいところだ。

喧騒の中で慌ただしく箸を動かしている光彦の姿を想像すると、彼の稼いだ金で自分だけこんな贅沢をしていることが申し訳なかったが、どこかに「別にいいじゃない」という気持ちもある。

大体いつも自分のお昼は残り物で済ませているのだし、たまに少しばかり贅沢をしたからといって何だというのだろう。

実際こんなふうにならぬと友達と買い物をして、一緒に食事をして……普段とは違う午後を過ごしているだけでずいぶん華やいだ気分になっているのは確かなのだから。

——ほら友樹だってこんなに楽しそうにしているじゃない。

たまには自分自身の楽しみも考えなくちゃ。母親がイキイキしていることが子供にとって一番だって本にも書いてあったし。これくらい主婦の必要経費よ。そう、別に気にすることなんかない

んだから。

直子は、まるでいたずらを見つかり言い訳をする子供のように、思いつく限りの言葉を頭の中に並べていた。

しかしこの時直子が使った「ごくたまに」という表現はあまり正確ではなかったことを、直子自身すぐに思い知らされる羽目になる。

みどりが、一緒に子供を幼児教室に通わせないか、と言い出したのはそれからすぐのことだった。

みどりの説明によれば、街の中心から少し外れた場所にあるそこは、権威ある女性教育家が指導する、〇才から二才までの乳幼児を対象とした教室で、K大やW大といった超有名私大の附属幼稚園を狙っている親がこぞって子供を通わせていることで有名なところらしい。

「うちはね、別に麻奈美に幼稚園を受験させようなんて考えているわけじゃないのよ」

みどりが、いつものねっとりともどわりつくような口調で言った。

「でもね、そういうところに通った子と通わなかった子とでは幼稚園に入園してからかなりの差が出るらしいの。今はどこの園でも家庭でのしつけを重視してるでしょ。とにかく一度見学に行ってみない？通わせるかどうかはそれからゆっくり考えればいいことだし」

とはいうものの、みどりがもうすでに子供をそこへ通わせる気になっていることは、その口ぶりからも明らかだった。

「幼児教室ねえ……」

直子はあいまいに言葉を濁して、みどりが持ってきた入会案内のパンフレットを見てもなしにめくってみた。

見ると確かに友樹と同じくらいの子供たちがたくさん載っている。

直子だってゆくゆくは友樹に何か一つくらい習い事をさせたいと、考えていないわけではない。

しかし何を習わせるにしても今はまだ時期が早すぎるような気がするし、しかもこのような幼児版塾のようなところに我が子を通わせようとは考えてもいなかった。

「今度の土曜日に体験教室っていうのがあるんですって。ね、行ってみましょう。トモくんも絶対喜ぶと思うわよ」

「うーん、そうね……」

——体験するだけならお金もかからないし、まあいいか。

直子は、半分みどりに押し切られる形で、その幼児教室に友樹を連れていくことになった。

その日は、季節が冬に逆戻りしたような冷たい風が吹き荒れていたにもかかわらず、体験教室には直子たちの他に数十名の親子が参加していた。中には三脚付きのビデオカメラを持ち込んで、見学に来たのか撮影に来たのかわからない人もいる。開始時間ぴったりに、奥からネグリジェみたいな服を着た、大柄な女が現われた。

「皆さん、本日は当教室の体験学習によろこそいらっしやいました。私がトレーナーの岡田です」

自ら「幼児教育トレーナー」と名乗る、その教育家はずいぶん若く見せてはいるが、どう見ても七十歳近いおばあさんだった。紫色のメッシュを入れた髪に顔の両脇で揺れる大きなイヤリング、教育家というよりバーのベテランママさんといった感じだ。

こうした場所でなければとても教育家には見えないだろう、と直子はひそかに思った。

子供たちは、そのおばあさんの指示で黒板に絵を描いたり、床に並べた輪っかをぴよんぴよん飛び跳ねたりする。友樹はもの珍しさも手伝ってか、それなりに楽しんでいるようだったが、この内容で費用が月に三万円というのはあまりにも高すぎる気がする。

教育家とそのアシスタントのような女性たちが、いちいち大げさに子供をほめ上げるのも、生徒を獲得したいというのがみえみえで、直子はあまりいい印象は受けなかった。

だが、みどりは麻奈美が賞賛されるたびにこちらが恥ずかしくなるほど喜び、ほほを高揚させすっかり興奮してしまっている。

直子はここについて来てしまったことを後悔した。

「どうする？私はなかなかいいと思ったけど」

帰りに寄ったデパート内にあるアイスクリームショップで、みどりが言った。

「あの先生、さすがに有名な教育家だわ。指導しながら一人一人をよく見ているのよ。子供の力を引き出すのがすごく上手で私、感心しちゃった。あれなら麻奈美を通わせてもいいなと思ったわ。直子さんはどうする？」

「うーん、そうねえ……」

直子はわざと曖昧に口ごもってみせた。みどりがいくら絶賛しようと、とても毎月三万円も出して友樹をあ教室に入れようとは思わない。

ただみどりに何と言って断ればいいのか、そのことを考えていた。下手なことを言えばみどりの気を悪くさせてしまいかねない。

「どんな理由で迷ってるの？トモくんすごくおりこうさんだったじゃない。あの中では一番誕生日が遅いのになんとみんなについて行ってたし。今から通えばK大の幼稚舎だって大丈夫かもしれないわよ」

「やめてよ。そんなどこかのお坊ちゃまじゃあるまいし。うちは近所の幼稚園で充分なんだから」

「けど、集中力や礼儀作法を身につけておいて損はないでしょ。ねえ、一緒に通いましょうよ。その方が麻奈美も心強いと思うし。ね？」

直子は急にぼかばかしくなった。

——そうか、そうなんだ。「直子さんはどうする？」そうみどりは言ったけれど、彼女の中には初めから直子の考えを聞こうなどという気持ちはさらさらないのだ。

その証拠に、直子が次の言葉を言いあぐねているそばからもう、みどりの話は次のステップに移っている。

「子供たちが教室に行くようになったらその間少し時間ができるわよね。私たちも何か習い事をしない？私って学校を出て一年もたたないうちに結婚しちゃったでしょ。大人になってから習い事って一度もしたことがないの。ああ、でも何にしようかしら。パソコンは苦手だし、お茶やお花ってのもいまいち新鮮味がないわよね……そうだ、イタリア語なんかどう？おしゃれだし教養にもなるし。ね？そうしましょう」

——ああ、まただ。

「ね、そうしましょう」みどりのこの言い方には、どこか人に有無を言わせない独特の響きがほんのかすかにはいえ、確実に含まれていることに直子は気付いていた。それはおそらくみどりと初めて言葉を交わした時から——。

「直子さんは、どうする？」

みどりが取って付けたように言う。直子は腹を決めた。

どうあがいてみたところで、結局はみどりの言うままになることは、初めからわかっていたことなのだ。

直子は元来マメな性格で、結婚以来欠かさず家計簿を付けていた。

家計簿といっても市販のノートに自分で線を引き、適当に項目を作って記入していく、という簡単なものだったが、それでも一家三人の家計を管理するには充分役立っていた。

しかし、みどりと関わるようになってからは、その習慣もすっかり崩れてしまっていた。みどりと
の付き合いで忙しくなったというよりも、使ったお金を正確に把握するのが怖いというのが正
直な気持ちだろう。直子は自分自身の心理をそう分析していた。

なにしろ友樹の幼児教室と、直子がみどりに誘われて通うことになったイタリアンスクールの月
謝が合わせて五万円。

他にテキスト代や交通費、レッスンが終わってからの飲食代もばかにならない。

みどりと会うたびに万単位のお金が飛んでいくのだ。

元々月一万円を積み立て預金に回すのがやっと、といった家計の中で、当然そんな余分なお金が
続くはずがない。

日々の生活費の不足分を補うために、直子が光彦名義のクレジットカードで一万、二万とお金を
借りるようになるまでに大して時間はかからなかった。

一体なぜここまでみどりに引きずられなければならないのか、直子自身もよくわからない。
下手に断ったらもう二度とみどりから誘われることはなくなるかもしれない、という恐怖感か
らか。それとも単なる見栄なのだろうか。

もちろん直子にはみどりと張り合おうなどという気持ちは全くなかった。

そもそもあのマンションにみどりが住んでいると知った時から、それは無理だとわかっていた。

でも心のどこか一部分に、何の苦勞もしらないような女に、そう簡単に優越感を与えてたまるも
のかという、ひどくねじくれた気持ちもないことはない。

いずれにしても、直子にとって今の生活からみどりと時間すっぱり抜け落ちてしまうことは、
もう考えられなくなっていることだけは確かだった。

「おまえ、何だよこれ」

珍しく早い時間に帰宅した光彦のために、おかずをもう一品つけようと、冷凍していた牛肉を玉ねぎと一緒に炒め始めた時だった。着換えのためまっすぐ寝室に入ったはずの光彦が、ネクタイを首の周りに引っかけたまま、紙切れを手にひらひらさせながら戻ってきた。

見ると、それは二、三日前に送られてきたクレジット会社からの請求書で、直子がファイルに挟みたんすの引き出しの奥に入れておいたものだ。

「何よ、人のものを勝手にさわるなんてひどい！」

直子は思わず箸を振り投げ、光彦の手からそれを奪い取った。

「ばかいうなよ。実印を探してただけだよ。そしたら見慣れないものがあつたからさ……それよりどういうことだよ、それ。おまえ俺に黙って借金してたのか」

「そんなに大げさに騒がないでよ。別に何百万も借りたとかいうわけじゃあるまいし。ほんのちょっとじゃない。たいしたことないわよ」

直子はできるだけ冷静にそう言い、紙片をエプロンのポケットにしまい込むと、光彦に背を向けて炒め物の続きを始めた。

「そういうことじゃないだろう！」

光彦の声に、一人でおとなしく遊んでいた友樹が、びっくりとしたように顔を上げる。

「大きな声出さないで。友樹が驚いてるじゃない」

「じゃあ、ちゃんと説明してみろよ」

「生活費がたりないのよ」

直子は背を向けたまま半ば投げやりに言い放った。

「はあ？何言ってるんだ。今まで普通に生活しててなんでいきなりそうなるんだよ。わけわかんないよ。それに――今まで黙ってたけどな。おまえ、最近金使いが荒くなったんじゃないか。たんすの中に見たことない服がいっぱい入ってるし、友樹にだってやたら高そうなもの着せてるしさ。育児でストレスたまってるのはわかるけど、俺だって少ないこづかいで何とか頑張ってるんだから、おまえも少し自制しろよ」

「仕方ないでしょ。私だっていろいろ付き合いがあるんだから。友達と一緒に買い物に行って私だけ何も買わずに帰ってくるわけにはいかないのよ」

「借金してまでか？そんなつきあいなんてやめちまえばいいだろ。馬鹿げてるよ」

直子はフライパンを揺すっていた手を止めて、光彦の方に向き直った。

「簡単に言わないで！私の気持ちなんて何もわからないくせに。あなたは外でいろんな人と会えるし、自由に飲みに行ったりできるじゃない。私にはそんな時間なんか全然ないの。友樹を生んでからいつもいつもこの部屋に閉じ込められて、誰とも話なんかできなくて――やっとならできた友達なの。私から友達を取り上げる権利は誰にもないわ。それともあなたが他に友達を探してくれるとでもいうの？」

頭の中に浮かんだ言葉をそのまま口に出しているうちに、直子の目から涙がこぼれおちた。口では絶対に直子にかなわないと知っている光彦は、わざとらしい大きなため息をつく、それ以上何も言わず寝室に戻っていった。

「やっとできた友達なの……」

直子は肉が焦げるのもかまわず、放心したように立ち尽くしたままつぶやいた。光彦にはああかみついたものの、自分の方が明らかにめちやくちな論理をふりかざしているのはわかっている

。光彦だからこのくらいで治まったが、もし短気な夫なら一発二発手が出て当然かもしれないとさえ思う。

それでもああ言わずにはいられなかった。

身体の深部から言葉が噴き出してくるように止まらなかった。

「やっとできた友達なんだから……」

何かを察知したのか、必死ですがりついてくる友樹を抱き上げようともせず、直子はただつぶやき続けた。

初冬にしては柔らかな陽気のせいだろうか。

珍しく午前中のうちにお昼寝をしてしまった友樹の横で、今のうちに、と直子がアイロン台を広げた時だった。ピンポン。玄関のチャイムが鳴った。

この時間の突然の来訪者といえば、宅配便のお兄さんか、そうでなければ保険か何かのセールスに決まっている。でも考えてみれば最近通販は利用していないし、それぞれの実家から何かが送られてくるのは友樹の誕生日の頃しかないから、きっとセールスの方だろう。

「全くもう……」わざわざ出るのは億劫だったが、これ以上チャイムを鳴らされると、せっかく寝てくれた友樹が起きてしまう。

直子は渋々立ち上がった。そしてドアを開ける前にはいつもそうするように、ドアに付いた小さな穴から外をのぞいた。

その瞬間、「一！」直子は思わず息をのんだ。

そこに立っているのは、見慣れた制服のドライバーでも保険のセールスレディでもなく、あのみどりだったのだ。

どうして…？いつだったかみどりに「直子さんのおうちってどこ？」と聞かれて、大体の場所を教えた記憶はあるが、まさかいきなり訪ねてくるなんて。

まだ掃除も済んでいないし、今日はどこにも出かける予定がなかったから化粧だってしていない。

とても家の中に人を通せる状況ではないのに…。

どうしよう。直子が躊躇している間に再度チャイムが鳴り響いた。このまま居留守を使おうかとも考えたが、ドアの横に立て掛けてあるベビーカーがみどりの目にも入っているはずだ。もしベランダ側に回られたら布団が干してあることにも気付かれるだろう。

ここで下手な小細工をすればあとでかえって面倒なことになるかもしれない。直子は思い切ってドアを開けた。

「あら、いないのかと思っちゃった」

みどりはあっけらかん、とそう言った。そのみどりに向かって、直子は何とか笑顔を作ろうとしたが、それはどうしてもうまくいかなかった。

「ごめんなさいね。急に来ちゃったりして。麻奈美とお散歩してたら急に直子さんに会いたくなっちゃって。そしたらたまたまトモくんのベビーカーを見つけたものだから……」

直子はみどりの言い訳めいた言葉には答えず、無言でみどりが持ってきたモンブランとコーヒーをテーブルの上に置いた。

「散らかっているでしょう？」

「ごらんの通り狭くって」

そんな常套句はいくらでも思いついたが、あえて口に出す気にもなれなかった。

大体なぜみどりはこんなふうに、突然訪ねてきたりするのだろう。

自分の立場に置き換えてみれば、事前に連絡もなく家に来られることが主婦にとってどれだけ迷惑なことかわからないはずはない。いや、ここまで不快に感じるのは相手がきつと他でもない、みどりだからだ。

直子はやけに甘ったるいクリームを口に運びながらそう思った。

自分はオートロックで厳重に守られた生活をしていながら、こちらが無防備なのをいいことに、ずかずかと入り込んでくる。この無神経さはなんだろう。

抜き打ちで人の生活をのぞぎに来るなど極めていやらしい行為ではないだろうか。

もちろん、直子もいつかはみどりを自分のアパートに招かなければいけない、とは思っていた。しかしそれは決してこんな形で直子の意志とは無関係に唐突に訪れるはずのものではなかった。

その時には、せめて少しでもセンス良く部屋を整え、飾り、最高級の紅茶と手の込んだ料理を出す。みどりのマンションに対抗できるはずはなくても、自分なりに完璧な形でみどりというゲストを迎えるつもりだったのだ。絶対にそうしたかったのだ。

それなのに…そんなささやかなプライドを持つことさえ許さないみどりに、直子は軽い憎しみさえ覚え始めた。整えるどころか掃除もまだの部屋。

カーペットの上には朝、友樹が落としたパンくずが散らばったまま。

そしてこれからアイロンがけをする予定だった山積みの衣類。

コーヒーは近所のディスカウントストアでまとめ買いした特売品で、ふだん光彦と直子が飲むにはこれで充分なので他に買い置きはない。みどりがその安物のコーヒーを一口飲み、まるで女優がセリフを言うように「おいしいわあ」そう言った時には直子はいたたまれなさに胃の縮む思いがした。

そのうえ、友樹はただでさえ寝起きがいい方ではないのに、途中で起こされたせいでひどく機嫌が悪くぐずっている。

ああよりによってどうしてこんなところに…。

直子はみどりの前で自分を取り繕うことに限界を感じていた。

笑おうとすればするほど自分の顔が引きつっていくのがわかる。

どう努力したところでこんな状況では会話がはずむわけもない。

できることなら今すぐどこかに逃げ出してみたい。

さすがに居心地の悪さを感じたのか、みどりはケーキを半分以上残したまま、「もっと遊びたい」とだだをこねる麻奈美を引きずるようにして早々と引き上げていった。

この日以来、どういうわけかみどりは直子の前からぶつつきと姿を消した。

公園にもいなければ電話も通じない。

それどころか、自分から直子を誘ったはずの幼児教室とイタリア語のレッスンにも全く顔を見せないのだ。

それは本当にこつぜんという表現がぴったりの消え方だった。

何度かみどりのマンションに行ってみようともしたが、最後にみどりと会った日の自分の態度を思い出すとやはり突然訪ねるのは何となく気が引けた。

もしかしたら何かの事件か事故に巻き込まれたのかもしれない、とも考えたが、ニュースや新聞で何も騒がれていないところを見るとそういうことでもなさそうだ。

誰か身体の具合でも悪くしたのだろうか。

しかしあんなにピンピンしていたみどりが急に電話の一本もできなくなるほど重病人になってしまうとも思えない。一体どうしたというのだろうか。

確かに最後に少し気まずい別れ方をしたのは事実だが、たかがあれしきのことで神隠しにでもあったかのように、突然連絡を断ってしまわなければいけないものなのか。

直子には全くわけがわからなかった。

やはり何を言われてもいい、みどりのマンションに行ってみよう—そう決心してから、タイミングを逃している間に更に数週間が過ぎた。

しかし、こんな形からとはいえ、再度訪れた友樹と二人だけの時間は、直子にとって思いがけずおだやかなものだった。

みどりが顔を見せない以上、一人で習い事を続ける気にもなれず、どちらもやめてしまった。

もうむりやり誰かに自分を合わせる必要もない。

みどりのことが気にならないといえばそれは嘘になるが、朝起きてから夜眠るまで何にもとらわれることのない自由さは、驚くほど新鮮でむしろ快適でさえあった。

みどりと出会う前、つまらなさを感じていた同じ日常が今となっては直子の中で全く違う形に変わってしまっていて、その事実がみどりを訪ねていくことを直子に引き延ばさせる理由になってもいた。

ついこの間まで、家々の庭に咲いていたコスモスの花はいつしかその寿命を終え、残された茎だけがゆらゆらと風に吹かれている。一見わびしくなるような風景だが、冬に向かっていくこの時期特有の、凜と張り詰めた空気が妙に心地良い。

考えてみればこうして友樹と手をつないで坂道を歩くのはずいぶんと久しぶりだ。

みどりとつきあうようになってからは習い事にランチ、買い物—と出歩いてばかりで公園に行くことはほとんどなくなっていた。久しぶりの公園は、ここ数日断続的に降り続いた雨のせいで、大小の水たまりがあちこちにできていた。

友樹は歓声をあげながら、自分から進んでぬかるみの中に飛び込んでいく。

直子はすかさず園内を見回してみたが、やはりみどり親子の姿はなかった。

代わりにほのかちゃんのママが目ざとく直子を見つけて小走りに駆け寄ってきた。

「元気だったの？最近ちっとも見ないからどうしてたのかと思ってたのよ」

「ごめんね。ちょっといろいろ忙しくて……」

何気なくそう答えてから、直子はふと気が付いた。

ああ、そうか。そういうことだったんだ。どうしてこんな単純なことに気付かなかったのだろうか。

みどりは他に行動を共にできる友達を見つけたのだ。あれからずっと、みどりに冷たい態度を取ってしまったことを申し訳なく思っていたけれど、みどりの方こそ直子があんな狭いアパートに住んでいると知って嫌気がさしたのかもしれない。

何ということはない。自分はみどりに友達として見切られただけだったのだ。そうとも知らず、のこのこマンションに行ったりしなくて本当によかった――。

「ねえねえ聞いている？」

はるかちゃんママの言葉にはっとして、直子は顔を上げた。

「あ、ごめん、何だったっけ？」

「もう……だからトモくんのママに頼みたいことがあるんだってば」

「どうかしたの？」

「あのね、私今度教材配達のアルバイトを始めたの。〇〇ゼミってやつなんだけど、知ってるでしょ」

「ああ、よくうちにもDMがくるけど。へえ、アルバイト始めたんだ。すごいじゃない」

「まあたいして稼げるわけじゃないんだけど、はるかのおやつ代くらいにはなるしね。それでなんだけど、今回急に転職が決まった人がいて、その人のエリア分が全部私に回ってきちゃって困ってたのよ。私一人じゃとてもさばき切れる量じゃないの。だからその分だけでもトモくんママに手伝ってもらえないかな……と思って」

「私に？」

「好きな時間でかまわないのよ。何とか引き受けてもらえると助かるんだけど」

直子はずかさず「やってみようかな」と思った。はるかちゃんママの迫力に圧倒されたというせいもあるが、みどりとのおつきあいで浪費してしまった分、少しでもお金がもらえるというのは今の直子にとって魅力的だった。

それに、近所を回って配達をするだけなら友樹を連れながらでもできるし、家事に支障をきたすこともないだろう。「引き受けてもらえる？感謝します。じゃあさっそく私から本部に連絡しておくわね。そのうちお宅に教材なんかが届くと思うからよろしく」

その言葉通り、数日後〇〇ゼミの販売代理店とやらから、教材の本やドリルがびっしり詰まったダンボール箱が二つ、直子宛に送られてきた。

想像していたよりも結構な量だ。

中を開けると、地図と束になった顧客リストが入っている。

その中に「赤坂麻奈美」の名前を見つけた時には直子は思わず「あ」と小さく声を上げた。

保護者欄は父親の名前になっているが、住所を照らし合わせると間違いなくみどりのマンションだ。子供の教育に特別熱心な地域ならともかく、このあたりで幼児のうちからこういった学習用の教材を子供に与えている親はかなり少数派だ。直子にしても、今まで友樹あてに送られてくるダイレクトメールすらまともに読んだことがない。とにかくいかにもみどりらしい、と直子は思った。

それにしても一直子がこれを届けに行ったらみどりはどんな顔をするだろう。

そして何と言うだろうか。

直子はいつも完璧な化粧を施した、みどりの少し頬がこけた顔を思い浮かべた。

できれば行きたくはないが、一方でいい機会だとも思える。いずれにせよ、これで何かははっきりするだろう。

そんなふうに勢いづけて家を出てきたものの、いざとなるとやはり気が重い。

なにしろ相手は自分から一方的に去って行ってしまった友達なのだ。

やはりみどりの家だけは、はるかちゃんのママに事情を話して代わってもらえばよかった—直子はマンションのインターフォンの前でしばらくためらってから、ようやく意を決してみどりの家の番号を押した。

「はい、赤坂です」

「〇〇ゼミです。麻奈美ちゃんに——」

「あっ、配達の方ね。今開けます」

インターフォン越しに聞こえてきたその声は、明らかにみどりのものではなかった。

げげんに思いながら、直子はエレベーターに乗りドアの前まで行った。ノックをすると、中からみどりとは別の女が顔を出した。

別の女どころかみどりとは似ても似つかない、背が低い小太りの女だ。

「あのう……」

どうしていいかわからず、直子が口ごもると、女はまるで弱者をいたわるような笑みをそのふくらんだ風船のような顔に浮かべ、「ご苦労さま」と言った。

「麻奈美ちゃん、ご本がきたわよ」

「はあーい」

そう言いながらバタバタと奥から走って来た女の子は、年格好は同じでも、直子が知っているみどりの娘である麻奈美ではなかった。

これはどういうことなのか。今この女は確かに「麻奈美ちゃん」と言った。そもそもこの女は誰だろう。

直子は再度ドアの横にある表札に目を向けてから、おずおずと口を開いた。

「あのう……失礼ですけど、こちらは赤坂さんのお宅で間違いありませんよね？」

「ええ、そうですけど」

「それじゃあ、赤坂みどりさん——はいらっしゃいますか？」

「みどりは私ですけど」

直子はますます頭が混乱した。

この女がみどりなら、直子の知っているあのみどりは一体誰なのだ。

自分の知らない間に親子がすっぽりと入れ代わってしまった—そんなミステリーめいたことが現実起こったのだろうか。

「もしかしてあなた……」

女は急に探るような目つきになった。

「かおりのお友達？」

「かおり……？」

「妹なの。主人の仕事の都合で帰国が予定より延びてしまったので、それまで妹にこのマンションの管理を頼んでおいたのよ。もう、あの子ったらお友達にきちんと説明もしないでしょうがないわね」

女はくっくつと喉の奥をひくつかせるようにして笑った。

それは鳥が絞め殺される瞬間の叫び声のようで、直子はめまいを起こしそうになった。

「やっこの秋に主人の海外勤務が終わって、これからは妹の近くに暮らせると思ったら、今度は妹の方が転勤でしょう。残念だけどこればかりは仕方がないわよね、業種が違うとはいえお互いサラリーマンの女房なんだし——あら、それもあの子あなたにお話してないの？ほんとにどうしちゃったのかしら。ごめんなさいね。あの子、夫の仕事の関係で東北の方に引越ししちゃうのよ。ええと、福島のなんていうところだったかしら……でも今週いっぱいはまだこっちに

いるはずだから、待って、今住所を――」

「結構です」

直子はとっさにそう叫ぶと、きびすを返して開いていたエレベーターに飛び込んだ。もういつときもこのマンションにはいたくない、と思った。

体は冷えているのに、頬だけが異常にほてっているのがわかる。

あの、まるで肥え過ぎたアヒルのような女とみどりが姉妹だなんて、とても信じられないことだがこれはきっと真実なのだろう。

そして大事なことは、直子がみどり―いや、本当はかおりというらしい女に騙されていたということだ。

でもそうだとすれば、彼女の目的は何だったのだろう。

それだけがどうしてもわからない。

直子は、まだ整理のつかない頭で様々なことを考えては、すぐに打ち消したりしながら、闇雲に自転車を走らせた。それは、全くの偶然だった。

目の前の信号が青に変わり、横断歩道を走り抜けようとした時のことだ。

道路の向かい側に、長屋のような棟続きの古ぼけた家が並ぶ一角がある。

その一棟の家の中から、女が大きなごみ袋を両手に持って出てくるのが目に止まった。直子は静止したまま、女の動きを目で追った。髪の毛を後ろで無造作に束ね、安っぽいセーターを着たその女がみどり、いやかおりだと気付くまでには少々時間が必要だった。まさか…嘘でしょう？

青信号を前に固まったように動かない直子を、人がげげんそうに見て通り過ぎていく。それでも直子はそこから一步も動けなかった。あれが…あの女がみどりなの？本当に？そこにいるのは、いつか彼女が声高に非難していた、女を捨ててしまっているとしたか思えない生活感丸出しの主婦そのものではないか。

いやあれはみどりじゃない。かおりだー。そうか、そうなんだ。その時直子はすべてがわかったような気がした。あの姉だ。おそらくかおりは、みどりというあの姉に対して、強いコンプレックスを持っていたのだ。どうあがいても、自分には手に入れることのできないものを何もかも所有しているあの姉に。優雅な海外生活。豪華なマンション。そして何よりもそれらのものを妻に与える事が可能な経済力を持つ夫。きつとかおりは、たまたま訪れたこの数ヶ月間を姉に成り代わる事で心のバランスを保とうとしたのに違いない。ちょうど直子があのマンションに始めて訪れた日の夜、自ら進んで夫に抱かれたように。

そう考えればすべて合点がいく。何もかもがほんの数ヶ月間という期限付きで仕組まれたゲームだったのだ。

かおりが一人で考え出した「友達ごっこ」という名のゲーム。

ただどうしてもわからないことがある。

かおりのゲームの相手役に直子が選ばれたのはなぜだったのか。

詰め寄って聞いてみたいと思うが、もうどうでもいいような気もする。

「ママー」

それまで自転車の後部シートにおとなしく座っていた友樹がじれてぐずり声をあげた。その友樹の声にはっとしたように振り向いたかおりの化粧気のない顔が、大きくゆがみ始めるのを目の端にとらえながら、直子はゆっくりと背を向けた。

そしてようやくわかった。

友達ごっこの相手を探していたのは、自分も同じだったのだーと。